



ARTCOURT Gallery

Yagi Art Management, Inc.

OAP ARTCOURT 1F 1-8-5 Tenmabashi Kita-ku Osaka 5300042 JAPAN

OAP彫刻の小径2011 「human / humor」 野外彫刻展 開催のお知らせ

大阪市北区のOAP“彫刻の小径(こみち)”では、2011年4月1日より、「human / humor」(ヒューマン/ユーモア)をテーマに一年間に渡る野外彫刻展が始まりました。OAP彫刻の小径は、水の都・大阪の街らしい色とりどりの旅客船が行き交い、天神祭でも知られる大川を臨む水辺のプロムナード沿いに位置します。また本展は、野外彫刻としては大変珍しく、年に1回テーマを設けて展示替えを行い、独自の“親しみやすい野外彫刻展”を開催しています。

今年の「human / humor」は、昨年および一昨年に続きゲストキュレーターに藤井匡氏を迎えての企画・構成です。野外彫刻においてゆかりの深い“人体彫刻”をベースに、現代美術家8名による作品が並びます。



【左】木村太陽【中】山村幸則【右上】袴田京太郎【右下】中ハシクシゲ

台座というステージの上に立つユーモアな“人”。あるいは、作家それぞれのユニークな“人間像”が作品へと昇華した“彫刻”。それらはどのような魅力で私たちに語りかけ、考えさせたり楽しませたりしてくれるのでしょうか。「human / humor」は都市の中で冷たくて硬い印象だった野外彫刻に対し、人間らしい温かみと“笑い”の豊かさを改めて与える契機となることでしょう。

◎「human/humor」 出展作家

伊東 敏光	ITO Toshimitsu	中ハシクシゲ	NAKASHI Katsushige
植松 琢磨	UEMATSU Takuma	袴田京太郎	HAKAMATA Kyotaro
金 理有	KIM Ri-yoo	松岡 徹	MATSUOKA Toru
木村 太陽	KIMURA Taiyo	山村 幸則	YAMAMURA Yukinori

◎ゲストキュレーター 藤井匡 (インディペンデント・キュレーター)

“実際には、この台座の上に人体彫刻が置かれたことは皆無に近いのだ。最大の理由は、日本の野外彫刻では人体彫刻ではなく抽象彫刻が大多数を占めることにある。それを前提にこの場所における人間像の可能性と不可能性について考えてみたい。” (本展リーフレットより)

【展覧会概要】

タイトル： OAP彫刻の小径2011 「human / humor」(ヒューマン/ユーモア)

会場： OAP彫刻の小径(こみち)

大阪市北区のOAP(大阪アメニティパーク)内、大川のプロムナード沿い

期間： 2011年4月1日 ～ 2012年春(4月下旬予定)

主催： アートコートギャラリー

協賛： 三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、株式会社三菱地所プロパティマネジメント

OAP彫刻の小径2011

<human/humor>

展覧会リーフレットは、
5月に完成予定です。



植松琢磨

【お問い合わせ】 アートコートギャラリー [八木・大場] ※ビジュアル資料をご希望の際は、お気軽にお問い合わせください。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F (有)八木アートマネジメント

Tel:06-6354-5444 Fax:06-6354-5449 E-mail: info@artcourtgallery.com Url: www.artcourtgallery.com



ARTCOURT Gallery

Yagi Art Management, Inc.

OAP ARTCOURT 1F 1-8-5 Tenmabashi Kita-ku Osaka 5300042 JAPAN

OAP彫刻の小径2011 「human / humor」

photographs: Takashi Hatakeyama

伊東敏光 ITO, Toshimitsu 《Sculpture of Red Water》 2010



1959 千葉県生まれ
1987 東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

| 近年の主な展覧会 |
2008 個展「Falling Sound」PAGEANT ギャラリー,
フィラデルフィア, USA
2009 個展「伊東敏光展 -Liquid scape-」
泉美術館, 広島
2010 個展「Liquid Muse」秋山画廊, 東京
「変容する場 Between Scrap and Build」広島

中ハシクシゲ NAKAHASHI, Katsushige 《If not, it can't be helped?》 2011



1955 香川県生まれ 東京造形大学彫刻科卒

| 主な展覧会 |
1994 個展「1994 米、その後?」米子市美術館, 鳥取
1999 「第3回アジア太平洋現代美術トリエンナーレ」
クイーンズランド州立美術館, オーストラリア
2000 個展「あなたの時代」西宮市大谷記念美術館, 兵庫
2001 「Super Flat」, MOCA/ウォーカーアートセンター/
ヘンリーアートセンター, USA
2006-07 個展「ZEROS—連鎖する記憶—」
滋賀県立近代美術館/鳥取県立博物館

植松琢麿 UEMATSU, Takuma 《emergence》 2011



1977 石川県金沢市生まれ
2000年 関西大学卒業

| 近年の主な展覧会 |
2008-09 「Ancient Futures」ソウル市立美術館, 韓国
2009 「神戸ビエンナーレ2009 招待作家展」
LINK-しなやかな逸脱」兵庫県立美術館
2009-10 「THE GOD OF THE SMALL THINGS」
casa Masaccio現代美術センター, Corso, イタリア
2010 「IMPULSE 22 with Fabian Chiquet」
IMPULSE GALLERY Christian Lohrl, ドイツ

袴田京太郎 HAKAMATA, Kyotaro 《河をみる》 2011



1963 静岡県生まれ
1987 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
1994 文化庁芸術家在外研修員として渡米
1996 五島記念文化賞美術新人賞受賞による海外研修として
チベット他に滞在
個展：ギャラリー白(大阪)、ヒルサイドフォーラム/
ギャラリーGAN/コバヤシ画廊/
日本橋高島屋美術館画廊X(以上 東京) 他
1998 「アート/生態系」宇都宮美術館
2003 「越後妻有アートトリエンナーレ2003」新潟
2009 公開制作「1000層」府中市美術館, 東京
2010 「権会展」資生堂ギャラリー, 東京 ['07, '08]

金理有 KIM, Ri-yoo 《Vessel of mind》 2011



1980 大阪府生まれ
2000 大阪芸術大学大学院芸術制作研究科修士課程修了

| 近年の主な展覧会 |
2009 「神戸ビエンナーレ2009・現代陶芸展」<準大賞>
2010 個展 neutron kyoto, 京都
個展 neutron tokyo, 東京 ['09, '08]
個展「Ceramics as new exotism」
INAXガレリアセラミカ, 東京
「陶芸の提案」ギャラリー白, 大阪
「BASARA展」スパイラルホール, 東京

松岡 徹 MATSUOKA, Toru 《大川老師》 2011



1968 愛知県生まれ
1992 名古屋芸術大学美術学部絵画科版画コース研究生修了
2004 スペイン国立バルセロナ大学大学院留学

| 近年の主な個展 |
2008 「The travelling Island」Murata & Friends, ベルリン
「DOUSOJIN Tremp project」Quiosc Gallery, トレンブ
「どこがおかしい。コドモ山の秘密」
おかざき世界子ども美術博物館, 愛知
2009 「佐久島のお庭」佐久島, 愛知
2010 「キノタマシキ」masayoshi suzuki gallery, 岡崎, 愛知

木村太陽 KIMURA, Taiyo 《無題》 2011



1970 神奈川県鎌倉市生まれ
1995 創形美術学校研究科卒業
1999-2000 五島記念文化財団 海外研修プログラム
によりドイツに滞在
2002-2003 ポーラ美術振興財団 海外研修プログラム
によりドイツに滞在

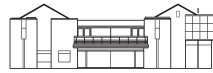
国内外で個展・グループ展多数

山村幸則 YAMAMURA, Yukinori 《彫刻の視点—傾いた男》 2011



1972 兵庫県神戸市生まれ
1994 大阪芸術大学芸術学部工芸科陶芸コース卒業
2005 国立オスロ芸術大学芸術学部大学院修士課程修了,
ノルウェー王国

| 近年の主な活動 |
2009 「神戸ビエンナーレ2009招待作家展」
LINK-しなやかな逸脱」兵庫県立美術館
Clayarch Gimhae Museum 金海美術館にて
滞在制作, 韓国
2010 Kunstlerhaus Guterabfertigung にて滞在制作,
ドイツ連邦共和国
滋賀県立陶芸の森にて招聘作家として滞在制作, 滋賀



ARTCOURT Gallery

Yagi Art Management, Inc.

OAP ARTCOURT 1F 1-8-5 Tenmabashi Kita-ku Osaka 5300042 JAPAN

OAP 彫刻の小径 2011

「human/humor」の条件

《OAP彫刻の小径》は既設の台座を前提に実施される野外彫刻展で、一年に一度の展示替えが行われてきた。当初、この形式での展示会を開始するにあたって、計画者は彫刻よりも台座を先行して決定しなければならなかった。つまり、現在の台座は、将来どのような彫刻を載せるかわからないままに設計されたものである。そのときに基準とされたのは、天板が75cm角、高さ1mという大きさから想像するに、おそらくは等身大の人体彫刻だろう。彫刻史とは何よりも人間像の歴史であったのだから、等身大の人間を基準とすることは自然な態度と言えるだろう。

だが、その後15年近くを経ても、この台座の上にオーソドックスな(解剖学的な)人体彫刻が展示されたことは皆無に近い。その最大の理由は、日本の野外彫刻では台座を必要とする人体彫刻ではなく、台座を必要としない抽象彫刻が大多数を占めることにある。その上で、台座を前提にするという困難に直面しながら展示会が開催されてきたのである。私自身、台座だけを見れば、伝統的な人体彫刻が相応しいと分かっているながらも、そうした作品を展示する気になれない。ならば、人体彫刻を展示することが求められる場に、人体彫刻が展示されないことの意味を考えなければならぬはずである。

日本で野外彫刻と都市計画の関係が始まるのは1960年代である。経済発展に伴う急激な都市化によって、1968年に都市計画法が制定され、ほぼ同時期に宇部・須磨・箱根の野外彫刻展が出揃う。それ以降の野外彫刻は、ステンレススチールやコルテン鋼など耐候性のある工業製品としての板材を加工した、幾何学的な抽象形態が主流を成してきた。その背景としては、彫刻的な志向と同時に、建築的・都市計画的な志向を想定することができる。彫刻と建築・都市計画の形態的な調和を求めると、両者を相似形に関係づけて、入れ子状の関係性を構築することが有効な解決策になるからだ。同時に、内容的には、彫刻自身に内在するものである寓意性(allegory)が忌避され、建築・都市計画の理念と一致させやすい象徴性(symbol)が歓迎されたことも考えられる。

他方、そうした建築的・都市計画的な志向とは無関係な場所で、彫刻家による人間像を巡る問いが深化されてきた。1960年代以降、テクノロジーの発達によって人間のイメージが抜本的に変容してしまったことは指摘されている(註1)が、おそらく原因はそれだけではない。私の考えでは、テクノロジーによってもたらされた地球規模の包括化・均一化という、人間を取り巻く世界像の変容の方が重要である。世界に外側が存在しないこと、世界が閉じられたと感じられるときには「人間が人間をつくる」ことのパラドックスが前景化するからである。

人間が自らの似姿を三次元的な存在として制作することは、伝統的に彫刻が依拠してきた方法である。その思想に根拠を与えた大きな要因は、旧約聖書・創世記の一節だろう。神は自らの姿に似せて土で人間をつくった。つまり、人間を含む世界に対して超越的な立場を取りうる神と、作品世界に対して超越的な立場を取りうる彫刻家には並行関係が見いだされてきたのだ。例えば、小さなトルソ像を持つ彫刻家の右手を石膏に移したロダン晩年の彫刻は、そうした意識の反映と看做すことができるだろう。

だが、グローバル化の進行した現在、世界の中にもう一つ別の独立した世界を存在させるといふ、自律的な作品世界を想定することは困難である。作品世界と現実世界が重なり合っていることは否応なく自覚されることになる。「かれが世界を造りたいのに、すでにそこに世界は存在しているという矛盾」(註2)を避けることはできないのだ。それは、社会との接触機会の多い野外彫刻において顕著に意識されるものである。更に、周囲から彫刻を自律させる機能を有する台座の消失によって、二つの世界の重層化は直接的に実感されることになる。彫刻を制作するという行為を自覚化するならば、彫刻家は自身の受動性、有限性、あるいは「世界内存在」であるより他はない(人間の条件)を自身によって露呈させてしまうのだ。

こうした状況下で、なおかつ人間像を志向するならば、それは自己を二重化したものになるより他はない。有限的な彫刻家のつくる有限的なるものとしての彫刻。彫刻家の有限性が、つくられた彫刻によって反復されるのだ。それは、超越者(無限性)が自らの似姿としての人間像(有限性)をつくることは全く異質なものである。

柄谷行人の定義するユーモアとは、超越的ではありえないことを自覚しながら、自分自身を(仮想的な)超越的視点から見るといふ自己二重化を通して「有限的な人間の条件を超越することであると同時に、そのことの不可能性を告知するもの」(註3)である。人間像をつくることの不可能性を覚しながら彫刻をつくること、あるいは彫刻をつくる過程で不可避免的に人間の姿が現れてしまうこと。こうしたパラドックスを抱えながら制作された彫刻は、上記に定義される〈ユーモアの条件〉に関与しているというべきだろう。もちろん、それは特に笑いと結びつく必要はない。だが、同文中で引用されるボードレールの言葉の通り「笑いは本質的に人間的なものであるから、本質的に矛盾したもの」(註4)である。パラドックスに直面した時に、パラドックスを解消するために、人間は笑うのである。そのとき、有限性という〈人間の条件〉から瞬間的に解放されると同時に、究極的には解放されないことを自覚することになる。

本展では、こうした「human/humor」の条件を巡る彫刻を、野外空間に設けられた台座の上に展示したい。それは伝統的な人体彫刻や都市的な抽象彫刻とは異なり、世界と切り結ぶ定式を持つものではない。結果として、あるいは笑いと結びつく場合もあるかもしれないし、あるいは他の感情と結びつく場合もあるかもしれない。それは、人体彫刻を展示することが求められる場に、人体彫刻が展示されてこなかったことの意味を問うと同時に、私達の都市に、社会に、生活に「human/humor」の条件がどの程度満たされているかを問うものとなる。

藤井 匡

(ふじい・ただす、本展企画・キュレーター)

註1 小西信之「ベリーベリー・ヒューマン」同展図録、豊田市美術館、2005

Judith Collins, *Sculpture Today*, Phaidon, 2007

註2 吉本隆明「彫刻のわからなさ」『吉本隆明全著作集8』勁草書房、1973(1972年9月稿)

註3 柄谷行人「ユーモアとしての唯物論」『ユーモアとしての唯物論』講談社、1999(初出1992)

註4 シャルル・ボードレー「笑いの本質について」